

柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

第178号

白井義胤翁
を訪ねて4

ジャポニスムの流れに乗って

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

飛躍の時来たる

妻を娶り、嫡男が生まれ、一家の主となった義胤氏は、もはや青年の域を過ぎ、西洋人相手の書画骨董の売買を専門とすることを決断した古美術商として、一步を踏み出したのでした。時に米・蘭・英・仏など西欧人は、シノワーズと名付けられた中国文化への傾倒から覚め、新たな対象を永年の鎖国の禁を解いた神秘の国、日本に定めたのでした。欧米の国々は、欧米で唯一日本との交易を許された国オランダを通じて、対日情報を得ていました。とりわけ、江戸の将軍に目通りを許されて、長崎から江戸まで、長い道中を旅した随行の医師らの旅日記は、異国情緒を誘って各国語に翻訳されて、知識層の興味を誘っていたのです。曰く「日本では、市井の庶民、婦女子までもが書を読むことが出来、書店の店頭は、大勢の客でにぎわっている。」「彼らはおしなべて礼儀正しく、お辞儀という挨拶を交わす。」「食事に関するしきたりは、めいめいが自分だけの小卓につき、食卓掛けやナブキンは用いず、小さな木で食べる。」など、長く潜在していた対日好奇心が、開国と同時に日本に押し寄せ、開港した長崎や函館、そして横浜や神戸に欧米各国の船団が訪れ、貴金属や生糸などと共に、日本的な美術品として、汎用性の高かった浮世絵が人気の品となったのです。

浮世絵には、肉筆画(1枚しか描かれぬので高価)と木版画(大量に刷られるので廉価)とがあり、当初は同時代人の制作した廉価な版画が欧米に運ばれました。こうした状況の中、ジャポニスムと名付けられて、欧米世界に一大センセーションを招いた日本ブームのきっかけとなったのは、1867年(慶応3年)にパリで開催された第5回万国博覧会への日本の参加でした。日本からは幕府の外に薩摩藩や佐賀藩も参加したのですが、幕府は日本的なるものを際立たせようと、日本式庭園を作庭し、和服姿の芸者衆に茶を点てさせて来場者にサービスしたり、肉筆の浮世絵や屏風、掛け軸、精巧な工芸品などを展示して注目を集めたのです。ここにフランスを中心に日本ブームが大きくなるとなり、1872年(明治5年)には、美術評論家の手でジャポニスムの解説が書かれ、さらに4年後の1876年(明治9年)には、japonismeの語がフランスの辞書に登場するに至ったのです。下に掲げた絵は、クロード・モネが同年1876年に発表した『ラ・ジャポネーズ』と題する油彩画です。金髪の女性が着物を羽織、扇をかざしてポーズをとる背景には、



モネ「ラ・ジャポネーズ」
(1876年、油彩画)

所狭しと団扇が貼り付けられ、さらに床にも団扇が散っています。浮世絵などが描かれた団扇は、安価で庶民でも何本かを所有できたので、日本で大量に買い付けられ欧米に運ばれたのですが、和装は高価な品です。しかもモネ作品の女性は帯を締めることはおろか、前を合わせることもしていません。日本鼻根のモネを含む、19世紀70年代の日本ブームの実像は、なお日本文化の表層を撫でるに留まっていたのです。

日本ブームが進化し、北斎や広重、歌麿や写楽、さらには狩野永徳や長谷川等伯といった日本画の巨星たちの画業や緻密で精緻な工芸品、産地を異にし独特の深化を遂げた陶磁器などに、目の肥えた美術品コレクターが注目するようになったのは、1980年代半ば頃、明治15年頃からでした。高価ではあるが本物の美術工芸品を求める人たちが、続々と日本にやってくるようになったのです。

古美術品の店を開いた白井義胤氏は、安物販売には背を向け、困窮した武家から質の良い本物を引き取り、目利き同士で価値がわかるバイヤーや自ら買い付けに訪れる趣味人を相手に、掛け軸、襖、屏風、蒔絵を施した文箱や手文庫、刀剣類や鎧兜、鞍、印籠、櫛や簪など、利幅も大きく、売り主にもまとまった金子をお届けする古美術商として信用を高め、1880年代半ばにかけて、業容を大きく広げていったのです。続く

シリーズ
麻生区の地名 その3

上麻生の地名

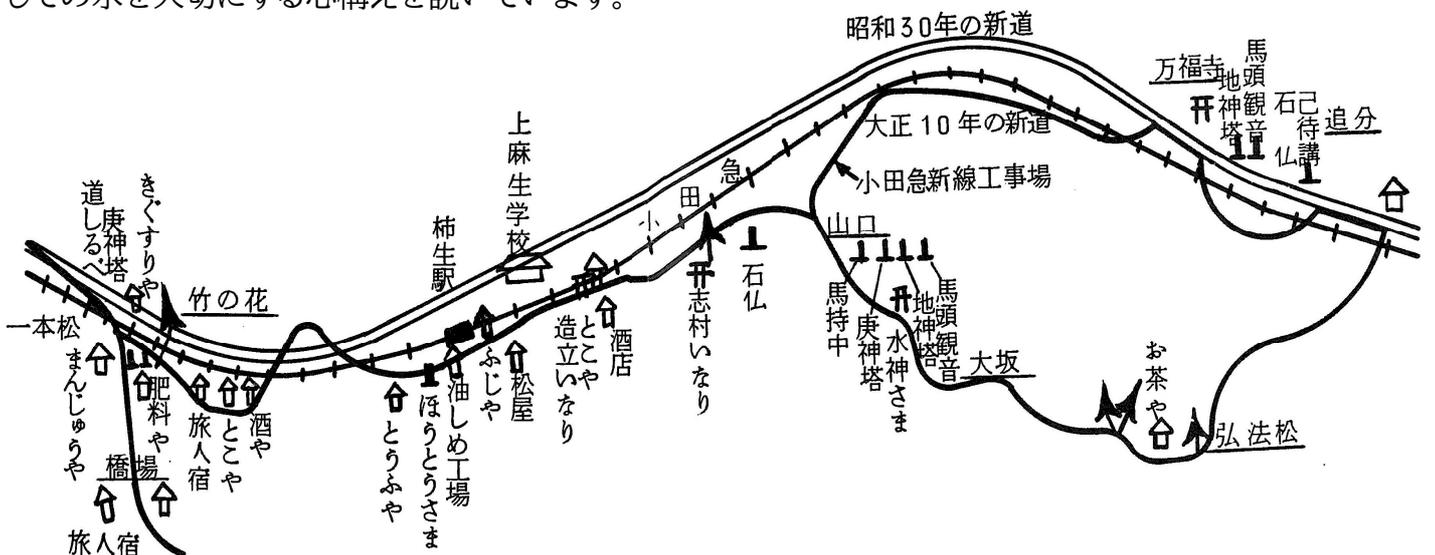
菊地恒雄(日本地名研究所 研究員)

上麻生村と下麻生村は江戸時代初期に王禅寺村から分離独立したと思われます。上麻生は麻生川の上流部であることから、上が付いています。津久井道が村の西側に通っています。津久井道は高石村の追分から弘法の松を経由して上麻生の山口に通じていました。明治41年に陸軍大演習のために、万福寺と上麻生山口の間に新道が完成し、大正10年に津久井道が新道に切り替わりました。現在の世田谷町田線は昭和30年に古沢口から鶴川村能ヶ谷を経由して町田まで新設されました。

王禅寺村から分離した関係から王禅寺とのつながりを示す地名がいくつかあります。山口は津久井道から王禅寺への出入口にあたり、東側の崖道には通称地名の「がけ松」があります。山口から真福寺側へ越える高台に「日光台」があり、王禅寺の真福寺谷には、「日光」の地名があります。日光は日向と同意で南に面した地の意味かと思われます。

歴史地名としては、「国領」があります。下麻生にも同じ地名のあることから、地続きの地域であったとも思われます。国領の近くに「亀井」の地名があり、亀井は伝承ですが、「亀井城跡」ともいわれ、鎌倉幕府の直轄領であった国衙領であったところから、「国領」と呼ばれたのかもしれませんが。元弘3年(1333)の足利尊氏の『所領目録』の「武蔵国麻生郷時頭」とあり、北条氏の金沢時頭の所領であったことがわかっています。康永4年(1345)に「保寧寺領武蔵国麻生内本郷・堀内乳牛役事」という文書があり、鎌倉の円覚寺塔頭の保寧寺領となり、この国領付近に本郷と堀内の地名が載っています。本郷や堀内(ほりのうち)は村の中心を意味する地名です。

「大ヶ谷(おおがやと)」は、柿生駅周辺から東側の地域を指し、「大ヶ谷戸」とも書きます。明治以降の村の中心で、熊野神社がありました。月読神社に合祀して、その跡地に柿生村役場がありました。大きな谷戸とも解されますが、必ずしも大きな谷戸というより、「中央」という意味もあったようです。「白根」は、柿生陸橋付近の地名で、丘陵の根本の意味か。白は広とも解され、開けたところの意味かもしれません。麻生川と片平川の合流点に、与田川戸の通称地名があります。片平との境付近に「竹の花」の地名があります。竹は崖、花は端のことで、崖の先端のことで、丘陵が麻生川に面した地形を指します。「竹の花」は横浜に通じる神奈川道と津久井道が合流する付近に旅人宿と床屋・酒屋があったと川崎市立稲田図書館発行の『津久井街道』に載っています。明治になって、神奈川道に沿った橋場と呼ばれた付近に旅人宿が数軒できました。しかしその後分れ道の一本松の辺りに生薬屋が、大正時代には饅頭屋・肥料屋・豆腐屋・便利屋などができて、竹の花の店は廃業してしまったそうです。「仲村」は、『新編武蔵風土記稿』で小名「中下」とある所と思われます。本来は「中村」で、これも村の「中心」という意味です。その付近に宿地という地名があり、従来は神奈川道に関連する宿という説がありましたが、私は旧真光川が鶴見川に合流する地点にあり、宿は水が滞るところと考えます。麻生水処理センター付近には、「角間田(すまだ)」という通称地名があります。昔よく狐火が見えたという言い伝えのある場所で、常に流路が変わるなど不安定な土地であったことが想像されます。亀井の常安寺には「かっぱ」の伝説があり、川を畏怖し日頃より用水としての水を大切にしている心構えを説いています。



川崎市立稲田図書館発行の『津久井街道』

シリーズ
教育の歩み 番外編

ゆとりの教育をめぐる(4)

小林 基男 (柿生郷土史料館専門委員)

「ゆとりの教育」は「ゆとりの時間」を産み出します。それは、児童・生徒に「考える時間」を確保し、受けた授業の内容を咀嚼し、しっかり理解するために必要な時間としてでした。ところが、マスコミや保護者、そして多くの教員たちは、「ゆとりの時間」は、児童・生徒の自由に任せる時間と受け止めてしまい、まさに自由放任の状態になってしまったのです。これでは「学力」が低下するばかりだと心配した保護者は、「ゆとりの時間」を塾通いの時間とし、相変わらずの「詰め込み教育」を実践したのです。文部省で、「ゆとりの教育」を提言した優秀な官僚たちも、ゆっくり時間をかけて提言の意図が各方面に浸透するのを待つことなく、ひたすら導入を急ぐという失策を犯したのです。

その結果はどうなったか。第2回で紹介した、寺脇研氏ら改革派リーダーたちは、世間の「ゆとりの教育」批判の大合唱に怖れをなした幹部たちの手で閑職に追いやられて職を辞し、自由な立場で教育実践に努める道に転身して行く結果になりました。「ゆとりの教育」は、突破力のある旗振り役を失ったのです。こうして、土曜日を出校日としない学校五日制という枠組みは残しながら、教育内容は再び増やしていく準詰め込み方式が復活したのです。

「ゆとりの教育」は、児童・生徒の遊び時間を増やすのではなく、考える時間を確保することを狙ったものでした。考えて、納得して理解できたことは、しっかり記憶の壁に染み込みますから、忘れてしまうこともなくいつでも引き出しから取り出して使うことが出来ます。ただ覚えているのでは、試験で好成績は残せても応用が利きませんから、実践で役立つことはできません。マニュアルの通りの対応しかとれないのでは、不測の事態には対処できません。確かにマニュアルは大事です。しかしそれはマニュアル通りの対応ができる時間的余裕がある場合に限っての事です。突然の災害時などでは、マニュアルが邪魔になることも少なくないのです。東日本大震災の大津波の対応では、マニュアル通りに校庭に子どもたちを集めて点呼をとっていた学校は、大きな犠牲を払うことになりました。逆に点呼などは省略して、とにかく子どもたちを高台に向かわせた学校は、犠牲者を出さずに済んでいます。学んだことを実践に生かせるかどうか、大切なのはこの点であって、試験の成績では測れないのです。

ここで、角度を変えてみましょう。小学校は学級担任制ですから、特定教科を除くと1人の教員がいくつもの教科を担当しますが、中学・高校は教科担任制ですから、教科ごとに(学校によっては、教科内の科目ごとに)担当の先生が変わります。それだけ教員の専門性が高くなります。その結果、自分の担当教科や科目だけに眼が向き、他教科には無関心な教員が多くなります。生徒たちには、曜日ごとの時間割が配られ、国語、社会、数学、などと教科ごとの時間数が示されるのですが、教員には、全ての教科・科目を含めた教育課程の全体像が示され、生徒たちをどのような人として育てることを目指すべきかの教育目標が示されます。それゆえ教員は、自分が担当する教科のみでなく、他教科が担うべき教育上の役割についても、それなりの理解を持つことが求められているのです。教育現場では、成績の上がらない不得意な教科(または科目)から逃げ出したい生徒から、担任の教師や教科担当の教師は、何故この科目(教科)を勉強しなければならないのか? 社会に出て何の役に立つのか? と問われることが多々あります。これはチャンスなのです。不明確で曖昧な答えで逃げてしまうと、その教科の成績不振がさらに進むだけになってしまいます。この時逆に、問われた教科の必要性や学ぶ意味を明確に生徒に説明してやれば、納得した生徒は不得手な科目でも頑張って勉強するようになります。駄々を捏ねたような言いがかりに近い問いであっても、それは生徒の信頼を勝ち得るためのまたとないチャンスなのです。こうしたチャンスを生かせる教員が、どれだけいるのでしょうか。特定の教科で学んだことは、それだけでは社会で生きていく上でどのように活かせるかは見えてきません。どの教科でもそれは同じです。ところがいくつもの教科で学んだことを頭の中で繋げて総動員してみると、異なる景色が見えてきます。科学史は、科学は本来総合的なものだったが、発達の過程で次第に個別的なものに枝分かれして進化してきたこと、しかし個別化は常に全体を意識しながら進めないと道を誤ることを明らかにしています。即ち全体と個別は常に行き来することが必要なのです。各教科で学んだことを、頭の中で横串を通して繋げてみると新しい景色が見えてきます。次回に記しますが、「ゆとりの教育」が用意した教育課程には、その仕掛けも施されていたのです。 続く

区民記者の楽

新百合に地下鉄がやってくる！

2030年、新百合ヶ丘に地下鉄が来ると聞き、地下鉄延伸期成同盟会副会長で日本映画大学理事長の富山省吾氏を訪ねた。現在決まっているのは、地下鉄の出入り口は南口側とし、バスロータリーは南北に分け、駅周辺を再開発すること。最も重視するのは、地下鉄、小田急線、路線バスの利用者と街への来訪者の利便性。川崎市は国土交通省が薦める We Do プログラム(注)の推進都市であり居心地も重視する。

富山氏が期待する今後の予定としては、2、3年で道路整備計画を進め、次の2、3年で北口再開発のグランドデザインを決定し、順次工事を進めながら2030年の開通を迎えられれば、とのこと。富山氏は、乗り継ぎのために通過する人が増えるだけでなく、新たな集客をしたいと考えている。そのために、市民館、21ホール、アート



We Do プログラムのイメージ

出展:国交省 HP 資料

センターに加えて収容人員1000名規模の大ホールを中心とした多目的エンターテインメント施設が欲しい。また、北口の昭和音楽大学と日本映画大学の提携による、映像と音楽双方に跨ったミュージアムやデジタルスタジオの実現が夢とのこと。道路整備を含めた公聴会が始まったら、住民のみなさんと一緒に参加したいと言われた。

さて、区制40周年の記念式典で、記者は地域の若いリーダーが夢を語るのを聞いた。一部を紹介すると、新百合農住都市開発(株)管理部長の鴨志田新氏は「来てもらえる街」と題して、乗り継ぎのほか、レジャーやイベントで集まる街を目指す。ホテルモリノ専務取締役の中島健介氏は「新百合ヶ丘を新新百合ヶ丘に」と題して、モリノを真のランドマークにする！観光協会事務局長の鈴木昭弘氏は「麻生区の魅力再確認」と題して、豊かな自然、名所、旧跡を外部に発信したいと、各々が熱く語った。

皆の思いは同じだ！

取材・文 あさお区民記者 中島久幸

(注)Walkable Eye Level Diversity Open の略。居心地を重視する都市再生プログラム。

「王禅寺村 御用留記帳」発行

史料館の地元に残されている志村家文書の翻刻資料本を発行いたします。近世史研究にとって重要な文献である志村家の文書群は川崎市地域文化財に指定されています。

原本は享保期から断続的に数十冊残っている「御用留」のなかの一冊で、主な内容は王禅寺村の領主である増上寺や関東一円を取り締まっていた関東取締出役から、村毎に継立てられてきた廻状、村から上申した願書などを名主家書き留めたものです。時は幕末。村々にはどのようなことが伝わってきて、村はどう対応したのか。大きく変わろうとしている時代を、多摩丘陵の静かな村の名主の帳面から読みとってください。

『文久二壬戌年・三癸亥年 王禅寺村 御用留記帳』

柿生郷土史料館発行

古文書写真付き192頁(3月19日発行) お問い合わせは史料館へ



柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:3月5・12・19・26日(毎日曜日) 4月1・15・22・29日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時~午後3時(緊急事態宣言等発令の場合は休館となります。)